

公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵黑板勝美書簡 翻刻と解説

渡 邊 剛

《翻刻の部》

凡例

- ・書簡・葉書は時系列で配列し、便宜上番号を付した。
- ・日付は書簡本文に依拠し、本文に記載がない葉書は消印に依拠した。
- ・年不明のものは、内容から推定して年を「」で補い、配列した。
- ・漢字は現在通用の字体とし、仮名は全て平仮名とした。
- ・封筒の宛名・差出人は改行を改め、メおよび消印は省略した。
- ・注意すべき事項は※を付して記した。

【1】徳富蘇峰宛（明治39年12月2日）

〔封筒表〕

赤阪区青山南町六ノ三〇 徳富猪一郎様 貴下

※下部に「①」の鉛筆書き

〔封筒裏〕

麹町元園町二ノ四 黑板勝美

※東京帝国大学文科史科編纂掛用の印抹消

〔本文〕

乱文御判読

奉希候以上

肅啓

貴著七十八日遊記

御恵贈被下難有

御礼申上候早速

拝誦仕候処全篇

みなこれ金玉の文

小生の如き足未だ

清韓の地を踏まざる

者といへとも自ら

感興の湧くを禁ずる

こと能はず寒灯の

下唯今読了

仕候特に触目偶

感の篇は我が対

清策に絶好の

注意を喚起する

ものなるを疑はず候

いろく御齋還の

珍物も御座候由

是非其内拝趨

仕度候先は御礼

かたく如此に候

草々頓首

十二月二日

黒板生

徳富老台

梧石

【2】徳富蘇峰宛（明治45年5月11日）

〔封筒表〕

赤阪青山南町六丁目 徳富猪一郎様 親展

※下部に「②」の鉛筆書き

〔封筒裏〕

黒板勝美 東京帝国大学文科大学史料編纂掛にて

※東京帝国大学文科大学史料編纂掛用 印に加筆

〔本文〕

肅啓愈御清康

奉恐賀候扱平

子鐸嶺君追悼

会に付御光来

の栄を得候よし

故人も嘸喜び

申候事と奉存候

然れば陳列会に

は前田家より霊

異記等の珍品も

出品せらるゝ事と

相成候処若し

此等に加ふるに老

台の御珍襲を

以てせば如何に
光彩を添へ候こと
かと發起人一同
の希望に有之
小生より特に御願
いたし呉^(マ)よとの儀
に有之爰に裁
一書御懇願
申上候次第に候就
ては御珍藏中の
珍書には御座候はん
も秘府略一卷
御光来の節御
持参被下候事
相叶間敷哉追
悼会に出席の人々は
多く古癖のもの
にて候事に候へば
若し御出陳
御許容被下候は、
実に難有奉存候
先は不顧失礼
乱文勿々如此に

御座候

草々頓首

五月十一日 黑板勝美拜

徳富老台

梧右

実は早く御願

可申積に候処準備へ

彼是不得其意

書中御願申上候

【3】徳富蘇峰宛（大正4年5月5日）

〔封筒表〕

東京青山南町六丁目 徳富猪一郎様 親展

※下部に「③」の鉛筆書き

〔封筒裏〕

慶尚北道韶川 黑板勝美

※（朝鮮総督府封筒第一号）印抹消

〔本文〕

肅啓

其後御無沙汰御託申

上候扱以御高庇諸

事総督府に於て心配

しくれられ発掘に就

ても助手の問題もすべて

解決の上去四月三十日

京城発本日太白山下

浮石寺まで参り申候

是より慶尚北南道を経

全羅北道に入り忠清

南道を調査し再ひ

京城に帰り候は七月

初旬の頃と奉存候何

卒寺内総督へも可然

御伝声願上候最早

今日迄にても一二発見仕候

ものも有之猶古蹟朝鮮に於ける保存

上憲兵及び学校教師等にも

注意致し居候が孰れ

総督帰任の上愚見を

陳ふる機会あらむと

奉存候

先は旅中多少の閑を得

申候まゝ一筆如此に

御坐候 草々頓首

五月五日 黒板勝美

徳富老台

梧右

※一七・一八行間に「朝鮮に於ける」と筆書き

【4】徳富蘇峰宛（大正5年4月22日）

〔封筒表〕

赤阪青山南町六丁目 徳富猪一郎様 貴展

※下部に「④」の鉛筆書き

〔封筒裏〕

黒板勝美 東京帝国大学文科史料編纂掛にて

※東京帝国大学文科史料編纂掛用 印に加筆

〔本文〕

肅啓

今朝は失礼仕候
さて其節拜見
仕候灌頂経中
卷奥書は園城^{維摩}
寺長吏公胤僧
正之筆蹟に有之
他に未だ所見無
御座候ものに御座候
建久□年は建久
三年にて後白
河法皇是年正
月以後御惱重
られ遂に三月崩
御諸方にて御祈
有之たる事当
時の記録にて明
了に御座候尤も
石清水八幡宮に於
て御祈祷ありし
事は他に史料
無之此点よりも
我等には面白く
御座候就ては恐入

公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵黒板勝美書簡 翻刻と解説

候得共史料編
纂掛に於ても右
奥書写真相願
置度候条拜借
出来申間敷哉
御伺申上候
先つ右御願迄
草々頓首
四月廿二日 黒板生拜
徳富老台
梧右
二伸
今朝御願候エスベラ
ント第三大会に対し
何か一筆御執筆
相叶候は、幸甚之
至に御座候

※四・五行目間に「維摩」と青鉛筆書き

【5】徳富蘇峰宛（昭和〔4〕年4月27日）
〔封筒表〕

徳富猪一郎様 林讓氏持参

〔封筒裏〕

黒板勝美

〔本文〕

肅啓新緑之候に
相成候処愈御清康
御起居被遊候由
恐賀之至に奉存候
扱而愚生大学卒業
直後故田口鼎軒
博士の下に微力を
致し候ひし国史
大系統国史大系等
今日より見れば不完
全相成点多々有之
候のみならず絶版
以来十数年に及び
候に付此度門下の人々
に奨められ新に校
正を加へ且日本紀私
記以下十六種の史書
を加へ全部六十冊
といたし再版に着手

仕候事に相成候
処愚生に取りては
畢生の事業にも
有之故鼎軒先生
の志を承けて出来
へき^{ママ}だけ善本と
いたし候については異
本の校合をはじめ出
版費も多大の額に
達し成るへく多
数の予約応募者
を得されば成功六
ヶしき事情の下に
有之候条御高評
を蒙らせば幸甚
不過之候もし
此度社賓として
御執筆中の大阪
毎日東京日々紙上
に国史大系再版の
必要と困難等につ
いて御高説を披瀝
し下され出版につ

御注意の点等拝

承仕り候事を得

は予約宣伝上尤

も効果あること、

奉存上候実は参

伺御願可申

儀に候へとも公私愈

忙不得其意平生

の御高情に甘へて

こ、に書中願意

申述候猶出版書

肆吉川弘文館主

林讓氏より委曲

御聴取下され度

奉希上候 頓首

四月廿七日 黑板勝美

徳富老台

梧石

【6】並木仙太郎宛（昭和6年7月22日〔本文欠〕）

〔封筒表〕

京橋区西銀座八ノ九 民友社内 並木仙太郎様

速達

〔封筒裏〕

東京市外渋谷町桜丘七八 黑板勝美 七月廿二日

※住所氏名は印判

【7】徳富蘇峰先生古稀祝賀会宛（昭和7年2月26日）

〔葉書表〕

東京麹町区丸ノ内 日本電報通信社（総務課）内 徳富蘇峰先生古稀祝賀会御中

※全て印字

〔葉書裏〕

徳富蘇峰先生古稀祝賀会
三月十三日午後四時 於帝国ホテル

出席

朱席

月 日 芳名 黑板勝美

※署名削除線以外全て印字

【8】徳富蘇峰宛（昭和7年8月20日）

〔封筒表〕

府下入新井、荒井宿 徳富猪一郎様 貴展

※左上部に「善本書目御札」「本朝文粹拝見願」と朱筆書き

※下部に「8・22」と鉛筆横書き・「ス」と筆書き

〔封筒裏〕

市外渋谷桜丘 黒板勝美

〔本文〕

肅啓

酷暑未去候処

愈御清康奉賀候

然者成賞堂

善本目錄并

図版御恵贈を

忝うし厚く

御礼申上候実は

小生去月来京城

の方に出張いたし居

今日迄打過候段

何卒御海容

下され度奉願候

猶右善本目錄拜

見之処本朝文粹

古写本御所蔵の

趣同書は目下続刊

中の国史大系に編

入いたし候ひしものゝ、

に有之校正用として

是非拜見仕度

若御許容を賜はらは

啻に迂生一人の幸

のみに無御座候

先は御礼旁御

願まで如此候

頓首

八月廿日 黒板勝美

徳富蘇峰先生

梧右

【9】徳富蘇峰宛（昭和14年6月13日）

〔封筒表〕

大森区山王一ノ二八三二 徳富猪一郎様

※下部に「ス」と筆書き

〔封筒裏〕

渋谷区栄通二ノ六 黒板勝美 六月十三日

〔本文〕

拝啓

初夏の候益々御

多祥の段賀奉候

陳者殊に唐突の

御願に候へども国史

大系所収本朝文

粹校合のために

御襲藏の古字本

朝文粹一卷拝

借仕り度く存じ申候

仍て不日丸山二郎氏

差出し度く何卒

特別の御配慮を以て

御貸し被下度く候若し

拝借の儀御差問御

座候はゞせめて一見

校合の儀なりとも

御許被下度候併し

是非く老生も一見

仕り度く候間兩三日の

間なりとても御貸被下様

懇願仕候誠に勝

手な御願ながら何時

御伺せしめてよろしき

か御洩しに預る

を得ば幸甚に存候

次に老生監修となり

大久保侯爵を顧問

として編纂中の

鹿児島県史も漸く

第一巻公刊と相成

り申候間一本御

手許にまで差上仕候

間何卒御覧被下度候

全部にて五巻の予

定に御座候

右御頼申上げ候

敬具

六月十三日 黒板勝美

蘇峰先生

座下

【10】徳富蘇峰宛（昭和14年11月13日）

〔封筒表〕

大森区山王一ノ二八三二 徳富猪一郎様

〔封筒裏〕

渋谷区栄通り二ノ六 黒板勝美

〔本文〕

拝啓

此度は本朝文

粹拝見せしめ

度く御頼み申候

処幸にも

御恩に預り候て

一昨日丸山氏を御

伺せしめ候一々対

校するの栄を得

申候段厚御

札申上仕候

右略儀御礼まで

十三日 黒板勝美

徳富老兄

座下

【11】徳富蘇峰宛（昭和18年4月26日）

〔封筒表〕

大森区山王一ノ二、八三二 徳富猪一郎様

〔封筒裏〕

東京市渋谷区栄通二丁目六番地 黒板勝美

※住所氏名は印判

〔本文〕

肅啓

陽春の候愈々御清祥奉大賀候然者小生古

稀之齡に達し候処不図も昨日は御鄭重

なる御祝品を賜はり難有頂戴仕候御芳

情の段御礼申述度如此御座候 敬具

少不如人何

況老過猶未

免敢言功

四月廿六日

黒板勝美

徳富猪一郎様

※本文は宛名筆書き以外印字

※漢詩は黒板直筆を印刷

〔本文別紙〕

拝啓春暖の候愈々御安康の段奉賀候

陳者今般父の古稀を御祝被下候て昨日祝賀記

念品（一金參万壺千六百拾九円四拾四錢也）御恵与に

預り申し候始終渝らざる御懇情の段家族一同

感佩の至に御座候父は発病以来既に七年を閲

みし候が御皆々様の御蔭によりて漸く息災に

最近は起居や、不自由乍ら殊に健康状態も宜

く新聞雑誌を繙き或は散策を試みる等日々平

安に消光罷在候間乍他事御放念被成下度候

顧みれば先年旅行中に大患を発し候際は各位の

殊の外の御配慮に預り申し候がその後倅に再

発もせずしてこゝに古稀の齢を重ね得たるは

これ偏に御芳情の賜物と存ずる次第に御座候

なほ此上とも能ふ限り家族一同看護相加へ御

芳志に酬ひ度存念に有之候何卒今後とも宜敷

奉願上候

右乍略儀以書中御礼の御挨拶迄如斯御座候

敬具

四月廿六日

黒板昌夫

徳富猪一郎様

※本文は宛名筆書き以外印字

《解説の部》

はじめに

神奈川県中郡二宮町の徳富蘇峰記念館を運営する公益財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団は、徳富蘇峰宛書簡を四万六千通余所蔵している（差出人は約一万二千余^①）。このなかには、アカデミズム・在野の歴史家の書簡も多く含まれており、従来もその存在は知られていたものの、歴史家研究・史学史研究に本格的に活用されるということは少なかったようである^②。

そうしたなか、平成三十一年に坂口太郎氏『大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と平泉澄―その史学史的考察―』（北九州市立松本清張記念館）が刊行された。大正・昭和戦前期における、徳富蘇峰と平泉澄の関係性や史学史的意義を論じたもので、歴史家の論著、先行研究や関係文献の博搜に加えて財団所蔵の歴史家書簡を活用し、平泉澄書簡

については末尾に翻刻を掲載している。特に、第二章「大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と官学アカデミズム」は、財団所蔵の歴史家書簡から、アカデミズムの歴史家たちが蘇峰の宣伝力のみならずコレクター・史料提供者としての側面を敬重した点を明らかにしており、歴史家研究・史学史研究における財団所蔵書簡検討の意義を示したものとええよう。最近では、財団所蔵の民間史家・郷土史家書簡が取上げられるようになつてきている。³⁾

本稿は、こうした研究状況を受け、財団所蔵の黒板勝美書簡の翻刻・解説を行うものである。既に坂口氏の報告書において一部の黒板書簡が取上げられており、それ以前にも黒板書簡への言及は存在するが、本稿はそれらに導かれつつ、両者にまつわる関連事項を整理・追究してみた。

明治・大正期の書簡

書簡内容に入る前に、黒板と蘇峰の面識の開始時期について確認しておきたい。

昭和十一年一月七日、青山会館において、蘇峰の文章報国五十年祝賀記念講演会が開催された。黒板は「我国史学界劃期的事業―六国史と『近世日本国民史』―」と題して講演しているが、冒頭で次のように述べている。

私が先生の名を始めて知りましたのは、未だ中学生の頃、国民の友といふ雑誌が発行された時分に、未だよく記憶して居ります

が、嗚呼国民之友現はれたりといふ言葉を以つて始められた。其文章には私共が魅せられたのであります。実は私「将来之日本」といふものが出ました頃は、未ださういふ書物を買ふ資力がなかつたので、遂に読む事が出来ませんでした。その後大学を出ましてから田口卯吉先生の許に尚ほ暫く御厄介になつて居つた。その時始めて田口先生の御紹介で、先生にお目に掛る機会を得たやうに考へます。爾来殆んど四十年その間色々の事に於て、先生の御教授を受けて居る関係から、此度の祝賀会に対しても、私としては衷心の欣びを禁ずるを得ないわけで、何とも感慨に堪へない次第であります。⁴⁾

これによれば、明治十九年一〇月刊行の『将来之日本』、そして翌年二月に刊行が開始された雑誌『国民之友』により、当時大村中学校の生徒であつた黒板は蘇峰の存在を知つたらしい。⁵⁾ 第五高等中学校在学中の明治二五年五月、校友会誌『竜南会雑誌』第五号に執筆した論文「藤本君文学上ノ意見ニ付テ」には『国民之友』掲載の落合直文論文の影響がみられ、黒板が『国民之友』に触れていたことがうかがえる。直接面識ができたのは、明治二十九年七月に帝国大学文科大学国史科を卒業し大学院に進学するとともに、田口卯吉の経済雑誌社に入つて『国史大系』校訂に従事していた頃だといふ。

蘇峰の名を江湖に広めた『将来之日本』は田口の経済雑誌社から刊行されたものであり、蘇峰にとつて田口は特別な存在であつたが、黒板にとつて田口は恩人であるとともに、『日本開化小史』を刊行して

国史への関心を朝野に巻き起こし、国史普及のために各種の出版事業を成し遂げた偉人であった。黑板は右の講演において、蘇峰の修史事業に対する田口の影響を推測している。⁽⁸⁾

明治・大正期の書簡のうち、最も古いものは【1】(明治39年12月2日)である。当時の黑板は東京帝国大学文科大学助教であった。

【1】～【4】の封筒表下部には①～④とそれぞれ鉛筆書きがあるが、誰の書込みかは不明である。

本書簡は同年一月に民友社から刊行された蘇峰の『七十八日遊記』に対する礼状で、同書は蘇峰による日露戦後の大陸・半島視察見聞記である。礼状の文面を額面通りには受け取れないが、中国の国民性に対する評論部分「触目偶感」が比較的興味深かったようである。同部分は中国における国家観念の希薄や「文弱」「我利」を批判的に述べる一方で、中国人の「人種」としての勢力を有力視するものであり、同書末尾の「結論一束」では朝鮮半島・大陸経営の困難を予測しつつ、日本人による指導の責任が述べられていた。⁽⁹⁾ 黑板は明治三六年脱稿の博士論文「日本古文书様式論」において、国家の興亡常なき中国の古文书が湮滅した一方、一系の皇室が続き政治的に安定した日本に多く古文书が保存されている点を述べており、多少意を強くするところがあったかもしれない。⁽¹⁰⁾

蘇峰が古典籍や古文书の蒐集を開始したのは明治三〇年代初頭で、明治末年にはほとんどそれを終えたともいわれるが、⁽¹¹⁾ ちょうど明治末

年から大正期にかけて、コレクター・史料提供者としての蘇峰と黑板のやり取りを伝える書簡があらわれる。この時期の黑板は、文科大学助教授のかたわら、様々な社会的活動や執筆を多くこなしており、蘇峰は桂太郎の死とともに現実政治から言論へと自己の軸足を移しつつあった。

【2】(明治45年5月11日)は、美術史家・平子鐸嶺の追悼会に関するものである。

平子は仏教史・美術史家で、法隆寺非再建論を唱えたことで知られるが、明治四四年五月に病で死去した。平子死去の翌月に刊行された『歴史地理』一七六には、黑板・藤田明連名の追悼文「平子鐸嶺君を悼む」が掲載されているが、これによると黑板と平子の親交は平子が法隆寺非再建論を唱えた頃から始まったようで、明治四一年には、両名や荻野仲三郎などが古筆の実物大復刻『汲古留真』刊行を図る汲古会を組織している。⁽¹²⁾

晩年に深まった交友から、黑板は平子追悼行事を取りまとめる立場となった。平子死去直後の追悼会では遺族に代わって謝辞を述べ、法隆寺への遺骨埋葬や、遺著出版について話しており、⁽¹³⁾ 同年一〇月に法隆寺に供養塔を建立した際には発起人総代をつとめている。⁽¹⁴⁾ 大正三年四月には、中川忠順、稲葉君山と共編で平子の論文集『仏教芸術の研究』(金港堂書籍)を刊行した。平子は法隆寺復興を念願していたが、こうした追悼の場で岡倉天心や黑板によってその遺志の継承が目指され、「法隆寺会」が結成された。⁽¹⁵⁾ この動きは岡倉の死などによって頓

控したが、やがて黒板らは改めて「聖徳太子一千三百年御忌奉賛会」を結成し、法隆寺復興・聖徳太子顕彰を目指して活動していった。

【2】は平子死去翌年の追悼会にあたるが、合せて行われる古典籍の展観に、蘇峰所蔵『秘府略』の出陳を願っている。同書は後に古典保存会によって複製されたもので、蘇峰のコレクションの中でも極めて価値が高かったものであった。⁽¹⁶⁾ もっとも、翌日開催の追悼会に関する唐突な依頼であったためか、貴重な出陳の数々を伝えている開催報告に記載はない。⁽¹⁷⁾ 七回忌にあたる大正六年の追悼会の際に改めて出陳が乞われたのか、『秘府略』出陳と蘇峰の出席が報じられている。⁽¹⁸⁾

【2】のような展観行事は明治末から大正期にかけて流行していったようで、大正二年には史学会大会における展観も開始されているが、⁽¹⁹⁾ 蘇峰は提供者としての役割を果たすのみならず、参加者として展観を楽しみ、アカデミズム史家と会話を交え、親交を深めたことであろう。

【4】（大正5年4月22日）は、蘇峰が自己の所蔵する『維摩経卷中』一卷の奥書について鑑定を求めたことに対する黒板の返答である。黒板は同奥書の価値を指摘するとともに、史料編纂掛で奥書の写真を撮影して所蔵するため、史料の一時借用を求めている。

本書簡については、館隆志氏が園城寺公胤研究において書簡内容を翻刻・紹介しており、現在の史料編纂所には大正五年四月に納められた同奥書の台紙付写真が存在していることから、蘇峰が黒板の要望に直ちに応じたと推定している。⁽²⁰⁾ また、坂口太郎氏は本書簡や、他のアカデミズム史家の書簡・回想、史料編纂所の目録などをもとに、コレ

クター・史料提供者としての蘇峰の重要性が、アカデミズム史家の蘇峰への協力姿勢を生みだしたことを指摘している。⁽²¹⁾

二仲で触れられている「エスペラント第三大会」というのは、当時の黒板が主導していた日本エスペラント協会が四月二九〜三〇日に開催した、第三回日本エスペラント大会を指す。明治三十九年に第一回、明治四〇年に第二回の大会を開催して以降、日本のエスペラント運動は不調に陥り、大会は長らく開催出来なかった。大正五年の第三回大会は運動復興の機運を受けた久々の開催であり、黒板としては蘇峰の宣伝力に頼りたかったのである。⁽²²⁾ しかし、少なくとも『国民新聞』紙上で蘇峰がエスペラントに言及した形跡はなく、黒板のあては外れてしまったようである。

坂口氏は、蘇峰の史料提供の手法として、コレクションの一部の複製・出版を挙げている。具体的には、民友社が行った丹鶴叢書本『日本書紀 神代卷』や、成實堂叢書や新成實堂叢書の刊行事業、前述の『秘府略』の複製許可などである。⁽²³⁾

黒板も、こうした出版事業や複製許可に好感を抱いていたことは疑いない。たとえば、大正三年に刊行した丹鶴叢書本『日本書紀 神代卷』については『国民新聞』紙上で評価しており、⁽²⁴⁾ 大正六年五月の国史談話会においては、同年に刊行された成實堂叢書第一〇編『論語鈔』全六巻について取上げている。⁽²⁵⁾ 蘇峰が所蔵の『貞観政要』巻十を大正四年一月に『仮名貞観政要』として刊行する際には、黒板が同書の筆写年代について質問を受けていたようであり、⁽²⁶⁾ 蘇峰の刊行事業の価

値はアカデミズム史家の協力によって高められてもいた。

大正八年、黒板は東京帝国大学文科大学教授に昇任したが、その前年、蘇峰はかねて念願の『近世日本国民史』執筆を開始し、『国民新聞』紙上にそれを連載した。この事業に対し、史料編纂掛に属するアカデミズム史家は協力的な姿勢を示しており、蘇峰自身の史料蒐集の努力もあいまって、アカデミズム史家も相応に評価する叙述が生みだされた。⁽²⁷⁾ 坂口氏はこれを「蘇峰と史料編纂掛の間に結ばれた互恵的関係の産物」と評している。⁽²⁸⁾

蘇峰は『国民史』執筆のため、各地で史蹟・史料調査を行ったが、旅先で黒板と出会うこともあった。執筆を開始した大正七年一月には東大寺で、大正一一年一月頃には奈良若草山の旅館・武蔵野で偶然会ったといい、後者に際しては「奈良へくるとよく会いますな」と語りあったという。⁽²⁹⁾

大正一三年一月、黒板は宮内大臣・牧野伸顕を訪問し、蘇峰の東山御文庫拝観について意見を開陳した。具体的にどのような意見を述べたのかは不明であるが、牧野は即断を避け、工藤壮平から通知させることにしたという。⁽³⁰⁾ 財団法人所蔵の蘇峰宛工藤書簡は、翌年一月に拝観を許可されたことを伝えるが、⁽³¹⁾ 前述のような蘇峰とアカデミズム史家の関係性を勘案すれば、黒板が拝観に好意的な見解を示した可能性はあろう。

さて、**[3]**（大正4年5月5日）は、黒板の朝鮮半島学術調査中に
出された書簡であるが、**[2]****[4]**とはいささか趣を異にしている。

「未だ清韓の地を踏まざる者」と**[1]**で述べていた黒板は、この時初めて朝鮮半島を訪れた。この調査は、東京帝国大学の出張の名目で行われたが、四月一七日に東京発、八月六日に帰京という長期のもので、半島滞在は百余日に及んだ。山川健次郎総長宛の「朝鮮史蹟遺物調査復命書」に記された行程によれば、四月三〇日に京城出發、五月五日は「浮石寺ヲ経テ西碧里」とあり、書簡と符合する。⁽³²⁾

黒板は蘇峰の「御高庇」に感謝しているが、蘇峰は韓国併合が行われた明治四三年から総督府機関紙『京城日報』『毎日申報』の経営に参画していたので、その関係によるのであろう。書簡執筆時、朝鮮総督・寺内正毅は内地にいたため、⁽³⁴⁾ 同じく内地にいた蘇峰に大まかな行程を伝えるように頼んでいる。黒板は帰途につく八月二日、⁽³⁵⁾ ちょうど朝鮮に渡ってきていた蘇峰を訪問している。⁽³⁶⁾

この書簡によれば、黒板は「憲兵」「学校教師」に対し、史蹟保存について注意を与えていたようである。この後、黒板は朝鮮古蹟の調査・保存事業に深く関与していくことになるが、⁽³⁷⁾ 最初の調査、しかも出発間もない段階で、早くもこのような態度を示していたことは興味深い。

黒板らアカデミズム史家と蘇峰は、基本的には歴史や古典籍において結ばれていたといえようが、黒板は蘇峰の実際政治上の影響力をも活用したのであった。

昭和期の書簡

大正八年に教授となった黒板は、昭和一〇年の定年退官にいたるま

で国史学科を統率するとともに、『新訂増補国史大系』校訂編纂事業、『更訂国史の研究』の刊行などによって、アカデミズムの代表的歴史家と目されるようになっていった。一方、蘇峰は昭和四年に国民新聞社を退社したものの、同年に大阪毎日新聞社社賓となり、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』紙上で『近世日本国民史』の連載を続けていた。

〔5〕（昭和〔4〕年4月27日）は、黒板の『新訂増補国史大系』校訂編纂事業の開始を告げるものである。書簡持参者の林譲は、当時の吉川弘文館社長であった。

本書簡については、坂口太郎氏が取上げている。同氏は、『新訂増補国史大系』内容見本によってその予約締切日が同年五月三十一日であったことを紹介し、予約応募者確保のために蘇峰の新聞紙上での宣伝を求めている書簡内容から昭和四年執筆と推定しているが、首肯できざる見解である。

この校訂編纂事業に関しては、黒板の下で事業に尽瘁した丸山二郎の回想がある。³⁹これによると、昭和四年三月末に丸山が事業の中核となるために姫路から上京した際には、「既にその計画は漸く進んで、趣旨書というもの、内容見本なども出来ていた」といい、同年四月から本格的に事業が開始されたという。⁴⁰

有力者に『新訂増補国史大系』刊行への理解を求める書簡は他にも残っているが、⁴¹言論出版界に影響力をもち、古典籍のコレクターでもある蘇峰の理解と宣伝力は、非常に重要であったと思われる。「大ジャーナリストとしての蘇峰の存在感を改めて認識させる」と坂口氏

が評する通りであろう。もともと、同氏の調査によれば、蘇峰は締切日まで『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』に推薦文を執筆してはくれなかったといい、ここでも黒板のあては外れてしまったようである。本書簡で、黒板は『新訂増補国史大系』校訂編纂を「畢生の事業」としており、その意気込みのほどが伝わってくるが、それを「門下の人々に奨められ」と述べているのは興味深い。

もともと、『国史大系』再刊を計画したのは、震災後の困難な状況下で吉川弘文館を相続した林譲であったらしい。これは、吉川弘文館の建て直しを図る計画の一つであり、⁴²吉川半七、林縫之助といった「先代に劣らないものを出版したい」という思いがあったというが、⁴³他方で、学生の要望もあったようだ。

丸山の回想によれば、大正一〇年頃には旧版はおろか大正期に刊行された六国史・類聚国史すら入手困難で、国史学科の学生による再刊希望の声は関東大震災もあつて非常に大きくなり、原田亨一などは熱心にそれを説いていたという。⁴⁴「門下の人々に奨められ」という文言は、こうした回想を裏付けるものといえよう。

とはいえ、この事業は単に学生や他の人々の再刊希望に答えるものではなく、新たな書目を加え、可能な限り善本を求めて校訂を加えるもので、まさしく黒板「畢生の事業」であった。

昭和七年、蘇峰は古稀を迎えた。徳富蘇峰先生古稀祝賀会宛の〔7〕（昭和7年2月26日）で黒板は祝賀会への出席を申し込んでおり、実際に出席している。⁴⁵前年一月には、祝賀記念論文集『知友新稿』（民

友社」が刊行され、三上参次、渡辺世祐、辻善之助、平泉澄といった有力なアカデミズム史家が寄稿、黒板は「東山御文庫及びその歴代宸翰について」を寄せている。

この原稿（四二〇〇字余）は「一気呵成に仕上げられたものらしく、末尾に細字で、「徳富蘇峰翁の古稀の寿を祝せんが為め、こゝに記念文集を公にせられんとし、並木君切に一文を需めらる。余以夜継日、新訂増補国史大系の校正に従ひつゝ、ある間にあつて、遷延又遷延いよ／＼今日が最後といふ日の朝記憶を辿つてこの一文を綴り謹みて蘇峰翁に似す。／昭和六年六月十九日 勝美」と記されている。⁴⁶末尾にこう書き添えたところに、『新訂増補国史大系』に対する黒板の打ち込みぶりが伝わってこよう。右の日付からみて、封筒のみ残っている並木仙太郎宛の【6】（昭和6年7月22日）は、『知友新稿』原稿に関するものかと思われる。

古稀祝賀会の四年後、昭和十一年一月七日には、文章報国五十年祝賀記念講演会が開催された。二千余名の聴衆を前に、黒板は本解説冒頭で紹介した「我国史学界劃期的事業——六国史と『近世日本国民史』——と題する講演をした。黒板は、国史の編纂著述は過去を究めて将来を作りだすために行われるものであり、その意味で、若き日の蘇峰が『将来之日本』で国家の将来を描いた精神と『近世日本国民史』執筆とは決して矛盾しないと述べ、蘇峰の事業の前途を祝している。⁴⁷

この前年、黒板は東京帝大を停年退官していたが、退官後も意気盛んであった。この頃には紀元二千六百年祝典評議委員会委員として

「国史館」建設案を熱心に主張していたが、ちょうど右の講演とほぼ同じ頃、一月五、六日頃に同建設案が委員会を通つたといひ、黒板宅を訪問した丸山二郎は、黒板が「通つたぞ……通つたぞ……」と連呼する姿を印象深く回顧している。⁴⁸

しかし、その数日後の一月一日未明、黒板は史蹟調査のために訪れた群馬県高崎の旅館において脳溢血で倒れた。⁴⁹一命は取り留めたものの、言語・身体に不自由を来たした黒板は、昭和二十一年二月に死去するまで療養生活を送ることとなった。奇しくも、蘇峰を称えた黒板の講演は、黒板の華々しい社会的活動の終末を飾るものとなつたのである。

黒板の発病前後に進められていた『新訂増補国史大系』校訂編纂事業において、蘇峰所蔵の『本朝文粹』が利用されたことを伝えるのが【8】（昭和7年8月20日）、【9】（昭和14年6月13日）、【10】（昭和14年11月13日）であり、ヨシカワ・リサ氏が【10】、坂口太郎氏が【8】【9】の内容にそれぞれ言及している。⁵⁰【8】封筒表には「8. 2. 2」「ス」、【9】封筒表には「ス」の書入れがあるが、蘇峰は備忘として封筒に日付＋「ス」（「返信スミ」の意）と書入れることがあり、重要な返事にそれが多かったという。

【8】と【9】【10】は字体に相違がある。先述の通り、昭和十一年一月に黒板は発病し、療養生活中であった。黒板は『新訂増補国史大系』の書名や指示のための図、あるいは揮毫のために筆を取ることもあったというが、【9】以降は脇付が従来多用していた「梧右」ではなく、

「座下」「敬具」を用いていることからみても、代筆とみてよいであろう。

【8】によれば、昭和七年に刊行された『成實堂善本書目』および『成實堂善本書目特製図版』の寄贈を受け、黒板は蘇峰所蔵の『本朝文粹』巻第七を知ったようである。

礼状が残っていないため、この時に閲覧し得たのか確実でないが、それからかなり経って再度『本朝文粹』の閲覧を求めて校訂に用いたことを示すのが、【9】【10】である。『本朝文粹』は、昭和一六年九月に『新訂増補国史大系』第二九巻として刊行されており、それに備えた借覧希望であろう。黒板が所蔵の平出鏗二郎旧蔵『本朝文粹』を佐佐木信綱に貸与したところ、佐佐木が贈呈と勘違いして返却せず、丸山二郎が返却を頼んだ逸話が残っているが、返却がなされたのは昭和一五年冬のことであり、ちょうど同時期である。

【9】の閲覧依頼時に蘇峰に寄贈されたと思われる『鹿児島県史』は黒板が監修、大久保利武が顧問となって編纂した県史である。第一巻は昭和一四年四月に刊行され、全五巻の刊行が終了したのは昭和一八年三月であった。編纂業務に従事した大久保利謙が、「先生最後の仕事」と評したものである。⁵⁴

【9】【10】は、『本朝文粹』の校合に丸山二郎が出向いたことを伝えており、黒板を支えた丸山の活動の一端がうかがえる。『新訂増補国史大系』校訂編纂事業開始時、黒板は丸山に専任の事務局長就任を打診し、丸山は姫路高等学校教授の職を辞してこれに参じた。以後、丸山は黒板の下で事業を遂行、黒板病臥後は実質的な責任者となり、昭

和三九年の全書目刊行に至った。⁵⁵丸山は黒板から『新訂増補国史大系』以外にも様々な仕事を任せられており、昭和期の黒板を考えるうえで、丸山の功績を逸することはできない。

最後は、【11】（昭和18年4月26日）である。黒板の古稀祝賀に対する礼状で、黒板の養嗣子・昌夫名の便箋と、黒板名の便箋各一枚が同封されている。便箋・本文とも宛名以外印字で、黒板の揮毫は直筆が印刷されているが、いずれの宛名も同一の書体で、黒板昌夫の筆であろうか。「少不如人何況老過猶未免敢言功」は、還暦の頃には黒板が好むようになっていた詩らしい。⁵⁶本書簡についてはヨシカワ・リサ氏が触れている。⁵⁷

黒板の古稀祝賀については、公益財団法人東洋文庫所蔵の『黒板博士古稀祝賀会報告書』（梅原末治旧蔵）にその概要が記されている。それによれば、黒板が古稀を迎える昭和一八年九月の前年、各方面から古稀祝賀の話が出て、発起人二九五名、実行委員一七名（相田二郎、石田茂作、板沢武雄、岩井武俊、江崎政忠、大久保利謙、岡田戒玉、坂本太郎、高嶋米峰、鳥羽正雄、橋本凝胤、平泉澄、藤田亮策、増永吉次郎、丸山二郎、村田俊彦、和田軍一）を揃えた黒板博士古稀祝賀会が結成された。

実行委員は昭和一八年に入って発起人その他から醸金を募りつつその使用策を協議した。『報告書』三一頁には、蘇峰が一般の寄付者として一口（一〇円）寄付したと記されている。

協議の結果、時節柄事業や祝宴は控えることとなり、集まった全額

を記念品料として贈呈することとなった。四月二五日に在京の実行委員が黒板宅を訪問して発起人名簿・醸金者芳名録・祝賀記念品料を贈呈したというので、返書の日付は贈呈の翌日付ということになる。

黒板の文面はごく簡略であるが、黒板昌夫の文面は右の報告書以外に祝賀の実態を伝えるものである。病中の黒板については、筆を取った話のほか、家族と娯楽に興じた話や、外出した話が残っているか、⁽⁵⁸⁾それと併せ、周囲の介助のもとで日常生活を送っていた病床の姿の一端もうかがえる。黒板の発病時、親友・荻野伸三郎が各方面から黒板の治療・入院費を募って黒板家の負担を軽減させたとい、⁽⁵⁹⁾「各位の殊の外の御配慮に預り」と述べているのは儀礼的文言にとどまらない意味があつたといつてよからう。

和田軍一によれば、「昭和十八年六月、博士は病の軽快に赴かざるを悟り、あらゆる公職から退くことを決意し」たとい、⁽⁶⁰⁾古稀記念祝賀を受け、自己の進退に想いをめぐらせたのであろうか。六月以降、黒板は帝室博物館顧問などの公職を続々と退いた。⁽⁶¹⁾黒板にとつての古稀は、公人としての節目となつたのであつた。

おわりに

本稿では、徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵の黒板勝美書簡を翻刻・解説するとともに、黒板と蘇峰に関する事実関係について若干の整理・追究を試みた。

書簡からうかがえる黒板と蘇峰の関係は決して濃密なものではなく、また特異なものでもない。ジャーナリスト、コレクター・史料提

供者、政界関係者としての蘇峰を敬重しつつその力を頼る姿は、他のアカデミズム史家同様の立ち位置といつてよいであろう。本稿が黒板の中学生時代から晩年に至るまで説き及ぶことになつたのは予想外であつたが、これは、蘇峰の活動期間の長さを示すものといえようか。

蘇峰と他のアカデミズム史家の関係については、財団所蔵書簡をてがかりとして、今後追究されるべき課題といえよう。これは各歴史家の人物研究の基礎となるのみならず、古典籍や史料を巡るやり取りがあれば、戦前の研究水準や史料状況を検討する材料ともなる。これと関連して、民間史家や隣接諸学の学者、コレクター、出版関係者などの書簡も重要であろう。アカデミズム史学はそうした人々の研究、史料蒐集、出版事業との交錯のなかで成り立っていったものであり、彼らの蘇峰宛書簡から、そうした営為をうかがい得る可能性がある。⁽⁶²⁾

最後に、黒板と蘇峰の關係にまつわる課題を一つ挙げておきたい。それは、蘇峰は『近世日本国民史』その他の著作執筆に際し、黒板の著作をどれほど、どのように参照したのかということである。

財団は、黒板の著書を四冊所蔵している。①『国史の研究』各説の部（文会堂書店、大正七年）、②『更訂国史研究年表』（岩波書店、昭和一年）、③『更訂国史の研究』各説下（岩波書店、昭和一四年第五刷、初版・昭和一年）、④『更訂国史の研究』総説（岩波書店、昭和一五年第八刷、初版・昭和六年）であり、①②④には蘇峰によつて傍線や頭書、付箋が付され、②は歿する前年・昭和三年に蘇峰自身が函を洪紙で補修している。⁽⁶³⁾杉原志啓氏が引用した時事通信社版『近世日本国民史』第一巻（昭和三八年）二〇一―二〇二頁には『国

史の研究』が登場しており、実際の使用例として興味深い⁶⁴⁾が、果して、他にはどれほど、どのように参照されたのであろうか。

この問題は、蘇峰の歴史叙述に対する検討であるとともに、黒板の著作の〈読まれ方〉の検討でもある。これについては、後考を期したる。

注

- (1) 財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵徳富蘇峰宛書簡目録』（財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団、平成七年）、塩崎信彦「蘇峰宛書簡をめぐる」（杉原志啓・富岡幸一郎編『稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰1863-1957』（藤原書店、平成二五年））。
- (2) 平泉澄書簡に関しては、Kiyoshi Ueda, "Hiraizumi Kiyoshi (1895-1984): 'Spiritual History' in the Service of the Nation In 'Twentieth Century Japan'" (Ph.D. diss., University of Toronto, 2008), p104, 128, 250. に言及がある。黒板勝美書簡に関しては、館隆志『園城寺公胤の研究』（春秋社、平成二二年）第三章第二節「公胤の筆跡について」五七七～五七九頁、Lisa Yoshikawa, *Making History Matter: Kurota Katsumi and the Construction of Imperial Japan*, Harvard University Asia Center, 2017, p216, 249. に言及があるが、これらについては後述する。
- (3) 大谷正「川崎三郎（紫山）と徳富蘇峰の往復書翰（一）（二）」（『専修人文論集』一〇五、一〇六、令和元年、令和二年）、鈴木仁「歴史家奥山亮の草創期―徳富蘇峰への書簡を中心に―」（『北海道の文化』九二、令和二年）。
- (4) 黒板「我国史学界劃的事業―六国史と『近世日本国民史』―」（『蘇峰会誌』蘇峰先生文章報国五十年祝賀記念特輯号、昭和二二年）六

頁。

- (5) 黒板はもとと佐賀中学校に進学していたが（黒板勝美「年少の秀才」、読売新聞編『名士の学生時代』岩陽堂書店、大正四年、一三七～一三八頁、中野礼四郎「黒板勝美君と余」『日本歴史』一四二、一九六〇年、八〇頁）、明治一九年に大村中学校に入学したという（久田松和則「大村史―琴湖の日月―」国書刊行会、平成元年、二六九頁）。

- (6) 同論文は前月に刊行された五高の先輩・藤本充安の著書『人田主義』（九州日日新聞社）の国語国字改良論を批判したもので、文中、落合直文の説に依拠すると述べた部分がある。これは、『国民之友』第一〇〇、一〇一、一〇四号（明治二三年一―十二月）に連載された落合「将来の国文」を指すとみられ、文章の美や正確な意思疎通における「語格文法」の重要性、日本語における「てにをは」の意義といった論点が参照されたのみならず、文章・語句も一部そのまま使用している。ただ、全て依拠しているわけではなく、各国の国語の「美」は「語格文法」によるといった外国への言及や、漢字による当て字濫用批判などは落合論文には存在しない。

同論文は、黒板が言語について論じた最初の論文ではあるが、後の 에스ペラント運動・エスペラント論とは一〇年以上開きがあり、この間に黒板が積極的に言語を論じたことがないため、関係性はほとんどないものと考えられる。筆者は「黒板勝美とエスペラント―歴史家における「言語」と「民族」の発見―」（『史苑』七九二、令和元年）で同論文に言及しなかったので、ここで付言しておく。

なお、同論文中、黒板は「語格文法」に従わなければ正確な意思疎通を図り得ないことは、「英会話ヲナスニ当リテ、往々「ヘルン」師ノ為ニ更ニ促サル、所以」と述べている（一八頁）。「ヘルン」はラフカディオ・ハーンのこと、五高時代の黒板はその教え子の一人であった。近年、平川祐弘氏編『ラフカディオ・ハーンの英語クラス』（黒板勝美のノートから）（弦書房、平成二六年）が刊行さ

れ、黒板のノートの写真版と追悼文「熊本時代のヘルン氏」〔『帝國文学』一〇一―一、明治三十七年〕が収録された。

右のノートには「この英文筆記ハ余熊本第五高等中学にありし比ラフカチオ・ヘルン（小泉八雲）氏の口授するところ今にしてこれを読むも猶興味津津たるを覚ゆ 大正一二年九月廿有一日夕」と黒板が再読した旨が書入れてあるという。平川祐弘「はじめに」は、熊本時代のノートを東京に持参するとは考えられず、関東大震災後に多くの人が東京から地方に帰つたことを考えれば、実家に帰省した黒板が偶然ノートを見つけて再読したのであらうとしている（一四四頁）。興味深い推測だが、同日午前中に黒板は東京渋谷の自宅で聖徳太子奉賛会理事会を開催しており（正木直彦『十三松堂日記』一、中央公論新社、昭和四〇年、一四九頁）、東京自宅での閲覧である。おそらく地震で散乱した蔵書や私物の整理中にノートを発見、思わず再読したのであらう。

(7) 文章報国五十年祝賀紀念講演会における諸家の講演に対する挨拶「謹で御礼を申し上げます―用意したお話は止めまして―」において、蘇峰は「着眼点」「思想」「文章」において、田口に「啓発」されたと語っている（四五頁）。

(8) 黒板注（4）七―八頁。

(9) 『七十八日遊記』については、杉原志啓「徳富蘇峰―「支那」観にみる「発想の根源」」（岡本幸治編『近代日本のアジア観』（ミネソラヴァ書房、平成一〇年）三二―三四頁、藪田謙一郎「徳富蘇峰の中国認識」（西田毅・和田守・山田博光・北野昭彦編『民友社とその時代―思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡―』ミネソラヴァ書房、平成一五年）一六八―一七五頁、藤田昌志「徳富蘇峰の日本論・中国論」（同『明治・大正の日本論―中国論―比較文化学的研究―』勉誠出版、平成二八年）九〇―九二頁。

(10) 「日本古文書様式論」のナシヨナリスティックな側面については Yoshikawa, *op. cit.* (note 2), p. 8. 「日本古文書様式論」自体について

は、渡邊剛「資料紹介 黒板勝美『虚心文集』内容見本」（『教育と研究』三七、平成三一年）二八―三〇頁で言及した。

(11) 杉原志啓「蘇峰と『近世日本国民史』―大記者の「修史事業」―」（都市出版、平成七年）五四―五五頁。

(12) 「汲古会の成立」（『歴史地理』一二一、明治四一年）八五―八六頁。黒板「学芸の守護者」（富田幸次郎編『田中青山伯』青山書院、大正六年）五八〇―五八二頁。

(13) 「平子鐸嶺追悼会」（『東京朝日新聞』明治四四年五月一六日朝刊四面）、高嶋米峰「平子鐸嶺君追悼会」（『新仏教』一二六、明治四四年、五九三頁）。

(14) 「平子鐸嶺氏供養塔の建立」（『歴史地理』一八六、明治四四年）九〇頁。

(15) 高田良信「法隆寺日記」をひらく（日本放送出版協会、昭和六一年）七〇―七九頁。

(16) 早川喜代次「徳富蘇峰」（徳富蘇峰伝記編纂会、昭和四三年）五七―五七九頁、坂口太郎「大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と平泉澄―その史学史的考察―」（北九州市立松本清張記念館、平成三一年）二四頁。

(17) 「故平子鐸嶺氏追悼会並記念陳列」（『考古学雑誌』二一〇、明治四五年）五四―五六頁。なお、「前田侯爵出品の嘉禎二年鈔本の霊異記」は出品されている（五六頁）。これは後に尊経閣叢刊『日本国霊異記 卷下 解説付』（公益法人育徳財団、昭和六年）、尊経閣善本影印集成40『日本霊異記』（八木書店、平成一九年）として刊行された。

(18) 「平子鐸嶺居士追悼会」（『歴史地理』三〇一、大正六年）九五―九六頁。

(19) 笹山晴生「史学会大会今昔」（『史学雑誌』一〇六一、平成九年）三九頁。

(20) 館隆志「園城寺公胤の研究」（春秋社、平成二二年）第三章第二

- 節「公胤の筆跡について」五七七～五七九頁。
- (21) 前掲坂口注(16)二二～二三頁。
- (22) この時期のエスベラント運動については、前掲渡邊注(6)一七八頁。
- (23) 前掲坂口注(16)一一、二四頁。
- (24) 黒板「嘉元本の日本書紀に就て」(『国民新聞』大正三年一月二〇日付三面)。国会図書館デジタルコレクションにおいて閲覧可能な本書 (<https://dl.ndl.go.jp/infondjip/pid/925905>) には、詳細な書き入れがなされており、下巻末尾(48コマ目)によれば、岡田希雄によるものとみられる。岡田については『国語・国文』一三四(昭和十八年)の「岡田希雄氏追悼記事」(後藤丹治・池上禎造・額原退蔵・清水泰・佐伯梅友、『立命館大学論叢』一二(国語漢文篇)三(昭和十八年)の「故岡田希雄教授追悼録」(高瀬武太郎・太田亮・小泉芝三・橋本循・加藤順三・塩崎達人・岩根保重・高瀬重雄・国崎望久太郎・後藤丹治・清水泰)、またその遺著『類聚名義抄の研究』(一条書房、昭和十九年)の藤井乙男、新村出、吉沢義則による「序」がある。また、川瀬一馬「世評」(同「袖の木」中央公論社〔中公文庫〕、平成元年、初版・昭和二十三年)一三三頁は興味深い。
- (25) 「国史談話会」(『史学雑誌』二八六、大正六年)九一～九二頁。『論語鈔』の解題執筆者は五山文学研究で知られた上村觀光(閑堂学人)。上村は、黒板『国史の研究』初版(文芸堂書店、明治四二年)「緒言」二頁で執筆協力者の一人として特に言及されるなど黒板と交友があった。蘇峰は、『五山文学小史』で上村を知り、以来交友を結んだという(蘇峰「上村觀光君を弔ふ」『人間界と自然界』民友社、昭和四年、三四三頁)。上村の死後、黒板や蘇峰の発起により、追悼会が開催されている(「前任主任觀光氏の追弔会」『禅宗』三七六、大正一五年、五三頁)。上村については、玉村竹二「上村觀光居士の五山文学研究史上の地位及びその略歴」(『日本禅宗史論集』上、
- 思文閣、昭和五一年)が右の『禅宗』掲載の追悼記事など資料編を付した詳細なものである。
- (26) 『貞観政要』巻十は元々金沢文庫旧蔵であったらしく、金沢文庫編『金沢文庫古書目録』(巖松堂書店、昭和十四年)の「金沢文庫旧蔵目録」六四～六五頁に記されているが、蘇峰の質問に対する黒板の回答が「第十付箋」として翻刻されている。記載は日付のみで年代は不明であるが、『仮名貞観政要』冒頭に筆写年代を推定した蘇峰の解題「貞観政要に就て」が掲げられているところをみると、黒板への質問は刊行以前であろう。
- (27) 前掲杉原注(11)が『近世日本国民史』の性格や叙述形式を検討、その実証性を指摘した。同書はアカデミズム史家の『近世日本国民史』への高評価として、三上參次(二九九頁)、渡辺世祐(一四二頁)、辻善之助(二四九～一五一頁)を挙げる。前掲坂口注(16)第二章「大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と官字アカデミズム」は、アカデミズム史家の批判的な『国民史』評の存在にも留意しつつ、アカデミズム史家が主として『国民史』史料蒐集の豊富さを評価していたことを指摘している。
- (28) 前掲坂口注(16)二八頁。
- (29) 前掲早川注(16)三三七、三三八頁。大正一一年の邂逅については、蘇峰『烟霞勝遊記』上巻(民友社、大正一三年)二二～一四頁にも記載がある。
- (30) 伊藤隆・広瀬順晴編『牧野伸頭日記』(中央公論社、平成二年)一七五頁。
- (31) 財団所蔵大正一四年一月六日付蘇峰宛工藤壯平書簡。
- (32) 本調査の内容については、「朝鮮史蹟遺物調査復命書」(黒板勝美先生生誕百年記念会編『黒板勝美先生遺文』同会、昭和四九年)が詳細。本調査に言及した研究としては、李成市「コロナリズムと近代歴史学―植民地統治下の朝鮮史編修と古蹟調査を中心に―」(寺内威太郎他編『植民地主義と歴史学』刀水書房、平成一六年)

七四～七五頁。

- (33) 柴崎力栄「徳富蘇峰と京城日報」(『日本歴史』四二五、昭和五八年) 六五～六七頁。
- (34) 山本四郎編『寺内正毅日記——一九〇〇～一九二八——』(京都女子大学、昭和五五年) 六七四～六七六頁。
- (35) 前掲黒板勝美先生生誕百年記念会編注(32) 一〇頁。
- (36) 徳富蘇峰記念塩崎財団編『徳富蘇峰記念館所蔵民友社関係資料集』(三一書房、昭和六〇年) 三九二頁。
- (37) 黒板と朝鮮古蹟調査・保存事業に関しては、藤田亮策「朝鮮古蹟調査」(黒板博士記念会編『古文化の保存と研究 黒板博士の業績を中心として』同会、昭和二八年)、前掲李注(32) 七七～八三頁。
- (38) 前掲坂口注(16) 二三～二四頁。
- (39) 丸山二郎「国史大系の編纂」(前掲黒板博士記念会編注(37))。
- (40) 同、二八二～二八六頁。
- (41) 早稲田大学図書館には、阪谷芳郎宛(年不明五月二〇日)、渋沢栄一宛(年不明六月二〇日)の黒板書簡が所蔵されている。両書簡とも『新訂増補国史大系』刊行への理解と援助(具体的には予約購読者や人脈か)を求める文面であり、いずれも昭和四年のものと考えられる。両書簡は早稲田大学古典籍総合データベース (<https://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>) にて検索・閲覧可能。
- (42) 吉川圭三「思ひ出すまま(一)——国史大系の出版印刷のことなど——」(『新訂増補国史大系』四付録月報、昭和四一年) 八頁。
- (43) 井野辺茂雄「国史大系の編纂」(前掲黒板博士記念会編注(37)) 二七二～二七四頁。
- (44) 前掲丸山注(39) 二八一～二八二頁、黒板昌夫・斎木一馬・坂本太郎・丸山二郎・皆川完一・桃裕行・山田康彦・吉川圭三「座談会『新訂増補国史大系』校刊の沿革(上)」(『日本歴史』一九八、昭和三九年) 三頁。
- (45) 並木仙太郎「感激の絶頂 祝賀会の盛況」(『蘇峰会誌』三二二、昭和七年) が当日の来会者を掲げており、一〇四頁に黒板の名前がみえる。
- (46) 黒板「東山御文庫及びその歴代宸翰について」(蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会編『知友新稿』民友社、昭和六年) 一〇頁。
- (47) この講演会の聴衆には井上光貞がいた。井上は、自己の恩師・坂本太郎が黒板の愛弟子であること、その坂本が黒板の「国史館」構想を念頭に国立歴史民俗博物館の設立を進言し、自分がその館長に就任したこと、から、「黒板博士は、わたくしのアイデンティティにとって重要な方」と述べ、その黒板の姿を見た唯一の出来事としてこの講演会を回想している(『わたくしの古代史学』文芸春秋、昭和五七年、一七～一八頁)。
- (48) 丸山二郎「仮称国史館」(前掲黒板博士記念会編注(37)) 一六六～一六七頁。
- (49) 「黒板博士高崎で卒倒し危篤」(『東京朝日新聞』昭和十一年一月二日夕刊二面)、「黒板博士病む」(『上毛及上毛人』二二六、昭和十一年) 七〇頁、和田軍一「臨時陵墓調査委員会」(前掲黒板博士記念会編注(37)) 二一六頁。
- (50) Yoshikawa, *op. cit.* (note 2), p.216.
- (51) 前掲坂口注(16) 二九頁注(25)。
- (52) 坂本太郎「黒板勝美博士の薨去」(『史学雑誌』五七三、昭和二十三年) 五二頁、丸山前掲注(39) 二九八頁、前掲和田注(49) 二二七頁、森克己「六十年の思い出」(森克己著作選集5『史苑逍遙』国書刊行会、昭和五一年) 四三九頁。
- (53) 皆川完一「本朝文粹と平出鏗二郎」(『日本歴史』五四八、平成六年) 六五～六六頁。
- (54) 大久保利謙・岡本堅次「地方史の編纂」(前掲黒板博士記念会編注(37)) 三〇九頁。
- (55) 丸山二郎と『新訂増補国史大系』については、前掲丸山注(39)、「朝日賞の人たち」①「新訂増補国史大系」の完成 国史大系編纂会

- (代表、丸山二郎氏) (『朝日新聞』昭和三年一月四日夕刊一〇面)、坂本太郎「国史大系と丸山二郎氏」(『新訂増補国史大系』五付録月報、吉川弘文館、昭和四〇年)。
- (56) 昭和一〇年一〇月、郷里に帰省した黒板は佐世保高等女学校で講演、その際、同校教員に色紙を与えているが、そのうちの一つに同じ詩を揮毫している(瀬野精一郎「黒板先生と三枚の色紙」『日本歴史』五〇六、平成二年、四一頁)。また、前掲黒板博士記念会編注(37)四八四、四八五頁の間にも同じ揮毫があり、「自悦華甲録李振祐句 虚心勝書」とある。李振祐は清代の人物のようだが、黒板がなぜこの人物の詩を知り、好むようになったのかは不明。
- (57) Yoshikawa, *op.cit* (note 2), p.219.
- (58) 黒板伸夫「追想 黒板勝美」(黒板伸夫・永井路子編『黒板勝美の思い出と私たちの歴史探究』吉川弘文館、平成二七年、初出「古代文化」四九一三(特集 黒板勝美博士を偲ぶ)、平成九年) 四〇五頁、黒板昌美「普段着の勝美おじいちゃん」(『同』三二一―三三三頁、黒板伸夫・永井路子・渡邊剛「黒板勝美と国史学界の思い出」(『同』四六、五二頁。右の『古代文化』四九一三には「代々木会による黒板先生病中慰安会」と題する写真が掲載されており、筑波藤麿邸で開催された慰安会に招かれた黒板の姿が写っているが、大久保利謙によれば本写真は昭和一八、九年頃のものだという)。
- (59) 「新春を彩る佳話 黒板老博士を繞る師弟愛の感激篇」(『東京朝日新聞』昭和十二年一月四日朝刊一一面)。
- (60) 前掲和田注(49)二一七頁。
- (61) 丸山二郎「黒板勝美博士の年譜と業績」(前掲黒板博士記念会編注(37)) 五〇〇頁。同頁に列挙された退職のうち、史蹟調査嘱託・朝鮮総督府博物館協議員以外は『官報』で裏付けられる。なお、黒板は歿するまで史学会顧問であったが(前掲坂本注(52))、こうした民間の名譽職でそのまま在任したものは少なくなかったと思われる。
- (62) 真名子晃征「高楠順次郎と徳富蘇峰―徳富宛書簡の翻刻と概要―」(『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』三三、平成二九年) は、高楠順次郎が蘇峰にその所蔵する古典籍の閲覧依頼や、情報の照会を行っていたことを財団所蔵書簡から明らかにしている。こうした書簡は、他の学者からも数多く発せられていたであろう。
- (63) 『更訂国史研究年表』の函に「昭和卅一 八月念五 蘇叟九十四補修」と記されている。渋紙による補修は蘇峰が多用した辞書などにみられるというが、同書の函は破損しているわけではなく、汚損部分を隠すために渋紙を貼っているようである。この点については塩崎信彦氏の御教示を得た。
- (64) 前掲杉原注(11)二五九頁。
- 〔付記〕
本稿執筆にあたり、蘇峰関係の調査・情報に関しては徳富蘇峰記念塩崎財団の塩崎信彦・宮崎松代両氏の御協力・御教示を得た。翻刻・解説に関しては坂口太郎・渡邊拓也両氏の御助言を得た。記して謝意を表す。